171223
平成 29 年度文部科学省受託事業
「学校司書の資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究」報告会
東京学芸大学附属世田谷小学校
河野広和

実践報告②-1　～新学習指導要領を踏まえた学校図書館活用と情報活用能力の連動～
附属世田谷小学校

①情報活用能力の系統表の作成

・新学習指導要領における、３観点評価【知識・技能】、【思考力・判断力・表現力】、【学びに向かう力・人間性】による編成を行う。
→従来の情報活用能力は、どれも大事、と思えるが・・・実効性に疑問。
→情報活用能力の全体像を指導側が意識し、年間でどのように育成を図るのか能動的に計画する必要。
　→カリキュラム・マネジメント
・情報が活用される場面は、問題解決の最中にある。子ども学びの文脈をデザインする必要がある。
→図書館だけ（内容・空間）では育成されにくい。教室での学びにいかに組み込むか。
　→やはりカリキュラム・マネジメント
・情報活用能力は、学校図書館と ICT のそれぞれの利点を活かす。
→情報活用能力が高い人は、適切に使い分けることができるはず。それぞれの性質の指導と、子ども自身による選択の機会が計画上重要。

②各教科カリキュラムへの情報活用能力系統表の反映

・PDCA サイクルに乗せ、不断に改定される。情報活用能力の中には、陳腐化の期間が短いものがある。
・情報活用能力が育っている／育っていない、という子どもの評価をもとに PDCA を行う。
・６年間の中で、【いつ・どこで】指導するのか明記しないと、従来の授業になりがち。決めたスケジュールは、全職員で実行しないと、６年間での学びの質は保証されない。

③学習環境の整備する

→理念や計画だけでは動けない。教員は、カリキュラムを実行しやすい環境が。子どもは、情報活用能力を発揮しやすい環境が不可欠。
→可搬性のある ICT（タブレット PC、ノート PC、移動書架）、各教室に大型モニタ、コネクタ類
→人的環境も重要。司書がカリキュラム作成、授業デザインに関わる場と時間の保証。

④実践事例 小学校理科 6 年 「卒業研究」

・いわゆる「探求学習」。指導内容は事前に規定しない。情報活用能力をはじめとした、これまでに培ってきた資質・能力、見方・考え方を発揮する場。
・卒業研究は、価値創造
これまで各教科では、様々な表現形式を学んできた。
→論文、説明文や科学エッセイなど
→自由研究や自由選択活動からの継続。試される発想と見通し（企画力）、粘り強さ。
・特別なことをしなくても、問題解決においては、つねに情報活用能力が発揮される。
命題をつくる、推論を行う、結果を整理する、事実と意見を区別する、情報の信頼性・妥当性、様々な推論の形式、共同体における貢献（情報提供）、情報モラル、機器操作、伝わりやすさ、魅力、編集…etc.
→ただし、指導者にその意識（情報活用能力育成のチャンス）があるか。
→また、子どもが、何が育ったかわかるか。（ふりかえり・メタ認知）

・卒業研究テーマ例（何を変数とするか、必要なデータや資料は何か、調査方法はどうするか）

時計の時間と心の時間	フレアスタック現象	消波ブロックの形状
圧力について	論破する！	必ず現実世界で起こる小説
日本に大統領がいないのは	戦争と未来、AI	人工知能
切り花を長持ちさせる	QR コード制作	醤油の好みと地方の関係
電磁石の力の強さ（要領外）	食虫植物はなぜ虫を食べるか	飛ぶのが得意な生物の体
電流イライラ棒制作	光合成と植物の組織	藤が池の将来
ハイブリッドカーの仕組みと制作	「運の良さ」はあるか。	酸性雨の発展
炎色反応		
苔の成長	ウーパールーパーの呼吸	中指を曲げると薬指が曲がる
ケトン食で痩せる	経絡秘孔	うずらの卵を孵す
四つ葉のクローバー	ラジオ体操の効果	溶けやすい入浴剤は何か

⑤中学校へ架橋

・各教科・領域の文脈で培われた情報活用能力は、中学校で活かされ、深い教科学習理解やさらなる価値創造に向かうべし。